

# ベストピア Bestopia

小原靖夫

ベストピアは小原靖夫の  
個人誌です。

平成二十三年九月  
第二九五号

## 使用済み核燃料の恐怖

### 1. 東日本大震災と フランスのアレヴァ社

NHK が8月10日と11日連夜にわたり放映した番組をもとに使用済み核燃料の恐怖を考えてみたいと思い今回は旅の最後をパリにしました。今月号の原稿はパリからです。

今回の旅の途中、フランスのマルクールで1人が死亡、4人が負傷するという原発事故が起きました。(9月12日)マルクールには1958年シャルル・ド・ゴール大統領が核爆弾(軍事用のプルトニウム)の製造を目的に作った工場があります。現在は民営化されアレヴァ社が経営しています。アレヴァ社といえば、東日本大震災による福島原発事故で早い段階で救援を申し出て来ていた会社で、日本でも有名になっていますが、フランスに本社を置く世界最大の原子力産業複合企業です。現在も高濃度汚染水の浄化等で福島で技術指導をしているものとおもわれます。

NHK の番組はこのアレヴァ社の話が中心に出てきます。それは世界でも数少ない使用済み核燃料の再処理工場をもっているからです。その再処理工場は英仏海峡にとびだしているコタンタン半島の岬近くにあります。

(地図を参照してください。地図1はヨーロッパ。Aの印がこれから話の中心になるコタンタン半島の岬のラ・アークです。地図2はコタンタン半島付近の詳細です。

地図3はコタンタン半島の岬の詳細です。)

ラ・アークには使用済み核燃料の再処理工場があり、かつては日本の使用済み核燃料も受け入れていました。今では自国内の58カ所の原子力発電所から送られてくるものを処理しています。外国の物を処理することが出来ないほど自国内の使用済み核燃料が多くなっているということです。

### 2. 使用済み核燃料の海洋投棄

使用済み核燃料はとても危険なものなので完全に密閉された屋内で、全てロボットで扱われています。人に触れると致命的なことになるばかりでなく、衣服に付着しても危険であり、機械施設に触れても危険なためです。そのような危険な使用済み核燃料の廃液が1993年迄は各国がドラム缶に詰めて海洋投棄をしていました。(旧ソ連、イギリスが特に多い)海は最大のゴミ箱と考えられていたのです。海の汚染が進み1993年ロンドン国際条約によって海洋は禁止されたのですが、禁止されたのは海洋投棄ということで、海洋投棄とは、船の上からドラム缶による投棄を意味し、陸上から海に直接投棄することは合法だということです。この解釈によってラ・アークから英仏海峡に放射性核廃棄物がパイプを通して垂れ流されているとのことでした。

ラ・アークの施設からコタンタン半島の岬までの4.5キロメートルの地下にパイプが埋められ、更に岬から1.7キロメートル海の中へパイプをつきだしています。毎年膨大な量の放射能を含んだ廃液がこれらのパイプを通して海の中に棄てられており、

海底は放射性核廃棄物で汚染されています。

フランスの非営利法人の原子力調査機関クリラッド社（チェルノブイリの原発事故をうけて1986年5月に組織された。第一の目標は市民の放射線保護、福島原発事故について日本の状態についても情報を発表しています）の分析では、このパイプからはセシウム、コバルト、ヨウ素129等の放射性物質を排出しており、海草類、甲殻類、貝類に吸収され食物連鎖の中に入り込んでいるといます。北極圏でもヨウ素129等が検出されており、北半球全体に影響しています。

ラ・アークは海水だけでなく空にも影響をおよぼしています。ラ・アーク施設の排気筒から出るガスに問題があるとのことで、クリラッド社は大きな凧を空に揚げガスを集め、測定をしたところ、放射能レベルは空気1立方メートル当たり数万ベクレルと高い数値になっているということです。中でもクリプトンがどう拡散されるかも調べたところ、風向き次第で2-3日でヨーロッパ全土がこの廃棄物の影響を受ける。ラ・アークの廃棄物のせいで、既に原子炉の事故が起きている状態になっている。日々放射能もれが起きている状態になっている。この再処理工場で使用済み核燃料を溶かす度に放射性物質が排出されるから、クリプトンの量はラ・アーク周辺の村では、1立方メートル当たり年間1000ベクレルに達している。

再処理工場で排出されるクリプトンの量は、大気圏核実験500回分の合計より多いと分析され、1960年から2000年にかけて北半球のクリプトン85の濃度が増加しているのはラ・アークの再処理工場からの放出が原因である。

### 3. ラ・アーク社の対応

これらの指摘に対してラ・アーク社ほどのような対応をしているのか？

ラ・アーク社には独自の検査チームがあり、透明性を強調しているのですが、？

「施設の排出物が環境を汚染していることは確かだが、健康を害する基準を下回っているから危険ではない。」と主張する。

アレヴァ社が基準を下回ったというとき、その基準が妥当のものかどうかについて調べを深める。チェルノブイリの場合も同様であるが、基準は広島長崎の被爆データが基になっている。すなわち、非常に短時間に外部から強烈な被爆を受けた場合が基準になっているのだが、ラ・アークの周辺の住民は低レベルではあるものの、日常的に汚染された空気を吸ったり食べたりしている。住民は微量であっても継続的に体内から被爆しているのだから、広島長崎の被爆データと同じにとりあつかってはならないというのがクリラッド社の立場です。

チェルノブイリの場合も始めは広島長崎の被爆データを基に、周辺でのガン発生率の増加はないと予想したが、5年後子供たちの間で甲状腺ガンが急増した。従ってラ・アーク社の場合も施設の稼働時間に比例して環境や健康に影響をしていると考えられますが、政府からも甘い基準の許可を取っているようです。

### 4. 使用済み核燃料の再処理

フランスの58カ所の原子力発電所からラ・アークに輸送されてきた使用済み核燃料は水中に入れられ再処理を待ちます。これはしばらく（平均5年）冷却しなければならないからです。

こころラ・アークには中間貯蔵用のプールが4つある。

プールの水深は9メートルで燃料が入った容器の上を深さ4メートルの水が覆っていて人間を放射能から守っている。水は放射性物質で汚染されているためプールの周りのポンプで常にろ過されている。平均5年ここで貯蔵された後、プールから取り出されて切断され、硝酸で溶かされリサイクルできるものとできないものに分離される。最後に残るのがウラン 95% プルトニウム 1%、ガラスと混ぜて固めた最終廃棄物 4%である。再処理とは放射能を消滅させるものではなく、廃液をガラスと混ぜて溶かして固め、最終廃棄物にすること。この固化された最終廃棄物は極めて危険で核分裂で生まれた物質の99%が含まれている。

最も危険な放射性廃棄物は原子炉で生まれる。原子力発電所の原子炉にはウランを詰めた燃料棒が炉心に置かれる。燃料棒の内部でウランが反応を起こし、核分裂を繰り返す。ウランの原子が中性子とよばれる粒子を放出し、それが他の原子にぶつかって、次々に分裂し大量のエネルギーをときはなち、燃料棒が熱を発生することで、原子炉の水を沸騰させ蒸気タービンを回して電力を生み出す。燃料棒は数年経つと使えなくなり炉心から取り出されプールに沈められる。時間をかけて冷却せねばならないからです。これが使用済核燃料のこと。

使用済核燃料棒の内部には核分裂で新たな放射性物質（プルトニウム、セシウム、クリプトン、ストロンチウム等99種）が生まれる。ガラスと混ぜられ固化された4%が最終廃棄物となるがこれが非常に危険なもので、放射能レベルの高い廃棄物をまとめたもの、この処理が人類的な問題になっているわけです。なんら解決方法を見いだしていないのです。

放射性物質は100%再生出来るのではなく、4%の恐ろしい新生物を生み出すと

もいえます。再生される95%のウランも濃縮が必要な劣化ウランであり、プルトニウムは原子爆弾になるわけです。

1000メガワットの発電量の原子炉を稼働させると毎年20トンの使用済核燃料ができる。その20トンの使用済核燃料から20本のガラスの固化体ができる。

アレヴァ社は小さく出来ることを誇張しています。しかし、使用済核燃料の中には高レベルの放射線物質が含まれ、数十万年後にまで危険性が及ぶものもある。ガラス固化したものは再利用できません。数十万年かけての半減期を待つしか無いのが現状です。

プルトニウムは原子爆弾になるばかりではなくウランと混ぜて新しいタイプの燃料になります。それがMOX燃料です。フランスの20カ所の原子力発電所で燃料の一部として使われています。

## 5. 回収されたウランの行方

再処理で回収されたウランが何処で、どのように濃縮され利用可能にされるのか？

アレヴァ社にはその技術が無いと言っている。どうやらロシアに輸送されているようである。モスクワ・グリーンピース支社のウラジミール・チクルス氏の調査では、再処理で回収されたウランはフランス南部のピエールラット（ピエールラット）はリヨンから南へ「ヴァランス」方面に下り、さらに「ヴァランス」から「アヴィニオン」へ向うとアヴィニオンから30km北に「オランジュ」という美しい街があり、そのすぐ北にあります。「トリカスタン丘陵地帯」にあり、ワイン生産（ぶどう栽培）をしているところです、「ローヌ河」の豊かな水を使って「トリカスタン原子力発電所」の名前で知られています。今年7月初めに原発での爆発事故が起こった場所でもあります。）で

保管された後、列車で900キロ離れた、ル・アープル（地図2を参照）に送られ、そこから船で3500キロのサンクトペテルブルグ、更に列車で3200キロ、シベリア奥深くトムスクに向かう。この危険物質は8000キロの旅をする。トムスクに着いたウランを含む放射性物質は市街を数キロ横切って核施設トムスク・7に到着する。ここが終点でセベルスクとも言われる外国人が立ち入り禁止の場所である。

人口は125000人、従業員、家族の住む所も有刺鉄線でかこまれている。柵の向こうにフランスのウランを濃縮する施設がある。

ロシアは1990年代ウランを濃縮して発電所用に新たな燃料を造る仕事を引受けた。——引受ける力が有ることを示すと解釈できます——

当時ロシアは核施設の維持費が不足し従業員の給料も支払えなかった。その為政府と原子力業界は諸外国に使用済み核燃料の受け入れを申し出た。

放射性廃棄物の受け入れは猛烈な反発をまねいた。

アレクサンドル地方議会のk議員の話。受け入れに関する議会の権限、議論はできるが決定権は無い。議員にも全てが秘密です。当局から報道関係者に発表されるものが自分達にも知らされるだけ。

住民はロシアとフランスが協力することに反対している。

トムスクの住民は確信している事。フランスは全ての放射性廃棄物をロシアに送りつけ埋めさせようとしている。と快く思っていない。政府と原子力業界にはこのフランスからの放射性廃棄物を受け入れることで巨額の金が支払われているにちがいない。1990年以降フランスで再処理された回収ウランは毎年120トン此処に運ばれている。列車が映しだされ。これが運んだ列車だ

それらがどうなっているか？それが問題だ。シベリアに運ばれたウランの貯蔵コンテナが宇宙から写しだされているのが映像でわかる。

これが探していたものだ。軍事施設に冷却塔がある。一個のコンテナの大きさがわかる。この一個の点が巨大なコンテナで10メートルの長さがある。これが上から見える。

コンテナだらけのこの場所は衝撃的です。無防備に屋外に置かれている。トムスク州安全管理部の責任者が答えた。ウランの貯蔵区画が間違いなくある。と。危険ではない。屋根が必要で有れば付けていた。

——屋根が無い、言い訳も巧い——

環境や健康のリスクは無いか？無いと答える。中身は漏れたりほしくない。これらのコンテナは密閉されている。唯一のリスクは飛行機の衝突である。その場合は放射性物質を含む雲が発生する。しかし、人々が暮らす居住区はズッと遠くにある。施設の敷地は巨大だから数haのコンテナで埋まっても問題はないという。

## 6. フランスのウランは此処に 到着後どうなるのか？

フランスの再処理で回収されたウランを輸送用コンテナから施設のコンテナに移す。回収ウランを先ず、気体の状態にする。原子力発電所の燃料として使うのに適したウラン235の割合を増やすため遠心分離機で濃縮する作業を繰り返す。最後にウラン235の含有量が増加した濃縮ウランを集めてフランスへ送り返す。

フランスから来た全てを送り返すのか？全部ではない。ウラン235の割合が減少した劣化ウランの殆どは此処に残されたまま。フランスは大量の劣化ウランをシベリアに捨てている。放射能レベルは低いが安

全な状態で、監視し貯蔵しなくてはならない。

この事をフランス電力公社は認め、濃縮した後の残りカスはシベリアに残されロシアの所有物となる。その量はフランスで回収されたウランの 90 パーセントを占めている。

僅か 10 パーセントしか再利用されない。原子力発電所が出した放射性廃棄物の僅か 10 パーセントしか再利用されない。アルバ社は 96 パーセントを再利用出来ると主張しているがそれを遥かに下回る。

————計算根拠が違う————

危険な輸送、環境汚染、再利用率の低さ——再利用の必要性に疑問を投げかけている。

現在商業用で再処理を行なっているのはイギリス、フランス、日本の三ヶ国です。他の国は使用済み核燃料をどうしているのか？

最も一般的な方法は——最終的な解決方法が見つかるまで大きなプールに入れておく。——これ以外の方法が無いようだ。

プール貯蔵の危険性について、ロバート、アルバレス——クリントン政権時代のエネルギー顧問、プール貯蔵の危険性について調査した。2003 年に報告書を提出した。テロ行為が一番怖い。プールが干上がったら使用済み核燃料の濃度が上昇し水素爆発が起こる。飛行機の衝突とテロ行為を考えるとプール貯蔵は認められない。

ドイツは使用済み核燃料を水を使わず貯蔵する方法を考えている。

コンクリートの貯蔵コンテナに入れて山の斜面に埋め込むようにしている。山で守れない場合は非常に分厚いコンクリートの建物で囲んでいる。飛行機が衝突しても壁が壊れたり放射性物質が漏れたりしないようにしている。コストがかかり過ぎるため

アメリカ政府はこの方法を拒否している。

フランスのラ・アーグには地対空ミサイルの兵器がある。使用済み核燃料を守るため攻撃されたら敵を撃ち落とすつもりである。EU ではストレステストにテロ行為からの防御システムが求められているようである。(アメリカにはそのような防御システムはない。)

使用済み核燃料を貯蔵するプールは世界中に 450 近くある。あらゆる発電所に少なくとも一つのプールはある。注意を払うべき場合が多い。テロ行為は私たちが想像できない方法で起こるのでプールで貯蔵される放射性廃棄物の危険性はますます増大している。

## 7. フランスの原発依存の高さ

何故このような危険を冒してまで人類は核開発をなし、原子力を発電に利用したのだろうか？特に何故フランスは 76% の依存率と高くなったのだろうか？その答えが意外なところからでてきました。

フランスの環境省を務めたコリースル・バーシュは次のように発言していました。

『私たちは廃棄物の処理方法が、いずれ開発されるだろうと考え、1970 年代に原子力発電にかけた。それから 40 年たったが処理方法は見つからないし、廃棄物を一挙に処分出来る技術も存在していない。私たちは行き詰まっている。今日言われる持続可能なエネルギーではない。

原子力エネルギーは特にフランスでは宗教のようなものです。右翼から左翼まであらゆる政党が支持している。地球温暖化の問題が更に追い風になっている。原子力エネルギーが私たちが救うと考えられている。——原子力エネルギーがフランス社会における諸悪の根源になっている。

不透明な秘密主義の下で行われている。真実を覆い隠そうとする風潮は他の分野にも広がっている。――原子力エネルギー問題を利用した秘密主義の拡大

――民主主義の危機――

現在の財政難の一因にもなっている。原子力エネルギーの推進に全力を注いだため、再生可能なエネルギー――水、風、太陽――や効率的なエネルギー利用方法の開発する機会を失ってしまった。フランスの産業は遅れてしまった。原子力エネルギーは議論のテーマになっても、その決定にはフランス国民は関与していない。最初から押し付けられてきた。』

何十年もそれを国民に押し付け、強いてきたのは何か？

原子力エネルギー問題の国際的アナリスト、マイケル・シュナイダー氏の話。

『フランスのエネルギー政策は政治家でなく、理工系の高等教育機関を卒業してきたエリート技術官僚が考えを進めた。政治家はこの分野に何も関与していない。

エリート技術官僚の独壇場です。だから原子力に関する政治家の知識ときたら全く目も当てられない。セゴレーヌ・ロワイヤルとサルコジ大統領候補の討論会がこの事を驚く程ハッキリ示している。フランス大統領に立候補した二人が原子力問題を討論したのですがなに一つ分かっていなかった。政治家がいかにエネルギー部門全部門をエネルギーエリート技術官僚に任せきってきたかを示した。

これは民主主義ではない。理解する必要があるのに誰もきちんと説明してくれないそればかりか国民が意図的に偽りの情報を与えられてきた事は歴史的に明らかです。原子力発電を持つ国では核を取り巻く秘密主義が不安をかきたててきた。反対運動に参加する人びとが求めてきたのは民主主義

です。』

## 8. 使用済核燃料の貯蔵方法

世界中で何十年にもわたって抗議活動が行なわれた。その結果ドイツ、ベルギーでは大規模な論議が行なわれ原子力発電の全廃が決定された。2000/6/14 ドイツ、シュレーダー首相は原子力発電を段階的に停止するという歴史的な決定をした。

原子力発電所の撤廃を決めても、既に生み出した原子力発電所の廃棄物の問題は解決できない。――ドイツは膨大な量の使用済み核燃料を再処理の為フランスへ送り再処理後に残った高レベルの放射性廃棄物を送り返してもらおう。

毎年廃棄物の輸送列車がフランスを出てドイツのゴアレーベンに向かう。受け入れに反対する人びとは熱心に抵抗した。警備に 15000 人の警官がだされたこともある。核に対する人びとの不安の現れである。放射性廃棄物には皆、恐怖を抱いている。原子力産業は国民の信頼をとりもどさねばならない。

ミューズ県ビュールには放射性核 廃棄物を地下深くに埋められるかどうか科学者達が確かめている 世界唯一つの研究所があり、地下では 35 人作業している。粘土層迄 490m 掘っている。

科学部門の責任者ジャック・ドレーと広報責任者のマルクアントン、マルタンの話。『このビュールは実験用、調査が終われば最終処理場が造られる。この研究所は水が浸透しにくい厚い粘土層の中にある。――この地層に廃棄物をうめます。最も放射線レベルの高い廃棄物を埋める。岩にそれを閉じ込める力が有るかどうかを研究している。数十万年の間放射能が漏れないようにしなければならない。数千年の間にこの廃棄物

の放射能は減線しますが、岩で全ての放射線を確実に封じ込めねばならない。それが出来れば放射線が減線していく間、安全が保たれる。――数十万年単位の話――

廃棄物を封じ込める為に使われるコンクリートや鋼鉄、ガラスはやがて劣化する。放射性物質はゆっくりと粘土層を通して地表に到達する。廃棄物は20万年の間危険です。その前に環境へ漏れ出さない対策を講じなければならない。

処分場が2025-2030年の間に建設されればざっと100年間は作業が続けられる。100年間の処分作業が終了しても、この施設は200年間監視される。可能ならこの期間が終わっても監視は続くが記録が失われ忘れ去られるかもしれないだから、処分場の安全性が必要。たとえ記憶が失われても、何も被害が起きないようにしなければならぬ。』

いつか、何処かの考古学者が発掘したりしないか？

『良い質問です。記録の問題はしばしば議論されます。

その議論には、二つの意見がある。

(1)処分場の上に巨大な芸術作品を置こうと言った。例えばピラミッドのようなもの。保存され、記憶されていく。未来の人びとに処分場の場所を伝えることができるでしょう。

(2)もう一つは何もしないでおこうという人びともいます。私たちが目印を残せば未来の人びとは好奇心をかきたてられ考古学者が処分場を発掘しようとするはず。どちらが正しいか、間違っているか、10万年後にならないと分からない。

放射性廃棄物を安全に管理するために、人間の記憶の継承を信じるか、或いは、地質学を信頼して目印を残さないのか。いずれにしても、廃棄物を影響しない地層に埋

める必要がある。

20万年後ここはどんな景色が残っているでしょうか

原子力は遙か先の未来まで影響を及ぼす。20万年、私たちは自分たちが出した廃棄物から6000世代もの人びとの命を守らねばなりません』

フランス原子力庁長官であり政府の科学技術顧問を務めているベルマール・ギゴアの話――この人の言っていることが理解できないのですが――

『私たちが今、眺めている大聖堂を建てた人は、最初の石をおいた時、その大聖堂がチリと消えるとは全く考えていなかったのです。大聖堂を建てるのに使った資材、自分たちの建築能力、時の試練に耐えると信頼していたはず。放射性廃棄物も同じで、長期間に渡って完全に封じ込め貯蔵しておく能力を私たちは持っています。』

――何故そんなことが確信できるのか？――

『放射性廃棄物を処分する時、忘れてはならない重要な言葉があります。それは信頼です。政治指導者、科学者経営者の責任感、物理の諸法則、そうしたものを、あなたが信頼しなければどうしようもない。より責任を負っている人間環境や人命に影響与える決断をください人間、そうした人びとを信頼しなければ何も始まらないのです。未来を描く為には信頼が必要です。』

――本気で言っているのか？――

番組の記者は高名な天体物理学者ユベール・リーグスに会って20万年を託するテクノロジーについて尋ねた。その答えは深く考えさせられるものです。

『原子力エネルギーが問題なのは未来を抵当にいれていること。原子炉の運転開始からその解体までは1世紀以上に渡るかもしれない。』

同じ政治体制が1世紀以上続くことはごく稀で、かつて非常に裕福であったアルゼンチンは今や貧しい国になった。ソ連は崩壊した。1000年という単位で政治的安定を考えることはできない。エジプト人は廃棄物を埋めていたとしたらどのように考えただろう。現在誰がそれを管理するのか？人類の歴史を見れば実に多くの大変動がある。そんな途方もない先の未来を管理ができると考えるには、おこがましいこと』

——人間の弱さや罪について考えることが必要だ。——

## 9. NHK 記者の結び

天体物理学者のユベール・リーグスの言葉、未来を抵当にいれていること。責任とということ——

開発をした技術をキチンと管理する責任  
生態系や自然環境を護る責任  
そして未来への世代への責任  
放射線の人体への影響へ責任

残念ながら、私たちは、原子力エネルギーという果実を享受しながら放射性廃棄物というリスクを解決する責任をまだ果たしていない。

エネルギーを選択するということは社会体制、ライフスタイル、そして文明の選択そのものだという事と少なくとも言える。その意味で原子力エネルギーとどう向き合うかは、まさに社会や文明の形を決めるこ

とであり、未来のヴィジョンと連動していなければならない。その選択が今、人類全体に突きつけられている。

以上が番組の後編です。前編についてはアメリカのハートフォードとロシアのマ・ヤークの原発事故——チェルノブイリ以前の1957年の事故の今に至る影響——を10月号に掲載します。

マルクスの疎外論が強調されていていい。資本主義が高度に発達したところでは人間が作り出した手段としての貨幣が、人間の手を離れて逆に人間を支配するようになる。マルクスの時代には次の時代として共産社会が考えられていたが、今は先の世界を示す言葉が見つかりません。金融資本主義の行き着くところは??????

## 10. パリで見つけたいい話。 解決技術は日本にあるかも。 のぞみ

使用済核燃料を地下深くに埋めるという発想を早くから持っていたのは日本人だったとパリの友人が話してくれました。その人は地質学者、鉱物の研究者であり技術者でもあり、埋めるべき場所まで具体的に知っているというのです。何度も日本政府に働きかけたが応答がなかったようです。今や日本だけの問題ではなく、人類の危機に瀕している今、全世界のあらゆる知識智慧を結集せねばならない時です。10月にできればその方にお会いしたいと考えています。

## ジャン・フランソワ・ミレーの晩鐘

今も私の部屋にある「ミレーの晩鐘」は元画より少し明るく大きめですが、とても大事にしています。貧しかった中学校時代に教科書で見た初めての絵でした。理屈抜きで大好きになり、その思いを胸に抱いて、バルビゾンに息子たちといっとうもう14年になります。今回は2回目の訪問です。祈りの内容はマリアの賛歌だと今回教えられました。

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

身分の低い、この主のはしめにも、目を留めてくださったからです。

今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者と言うでしょう。

力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。——略——

ルカによる福音書1章47節から57節  
(マリアの賛歌)

20年も前に旅先で知己となった方で西川さんという方が、大事にしている絵なのだが私に買ってもらいたいとの申し出によって、私のもとにあります。

西川さんは模写も上手ですが、著名な経済界の大物の似顔絵も随分描いてこられました。

ミレーには「落ち葉拾い」「種をまく人」など日本人に親しまれる作品が多いのですが、大原美術館にある「グレヴィルの断崖」は生まれ故郷の海岸を描いたものであることを今回パリの知人から教わりました。

地名はグリュシーといい、何と今回話題にしたラ・アージュから数キロの近さです。写真でみせてもらったのですが、美しい海岸です。ここに使用済核燃料の再処理工場が

あることを知ったらミレーはどんなに哀しんだかとせつない気持ちになりました。

ミレーは1814年—1875年の生涯で22歳にパリに出るまでずっと住んでいた所です。故郷を愛し幾度も帰郷してミレーの原風景となっているところでは

「種をまく人」は岩波書店のロゴマークになっていることは有名ですが、ゴッホが師として仰ぎ、追随し学んだことも常識とのこと。遅い学びに赤面の思いです。号をあらためてミレーについての思いを書きたいと考えています。

ここではラ・アージュに非常に近い所にミレーの誕生の地があることを示していきます。

## その他のこと

フランスの大手3銀行のギリシャ国債の持ち分が並々ならない額で、ギリシャの破綻で一番の被害を受けるのではないかと考える人が多くなり、大手銀行からの預金の引き出し中堅銀行や政府機関にお金が流れているとのこと。市民にも不安が現実味を帯びるのではないかと恐怖に変わっています。パリでは1ユーロは既に100円を割っていました。(9月23日現在)

中国人のパリ訪問者の数も減少している実感でした。ルイヴィトンのお店まへの行列には出くわしませんでした。中国の経済もバブル崩壊前の状況ですから、頂点は過ぎたことを実感します。職を求める人の数は益々増えています。

ストは突然かつ頻繁にあるようで、私の予約していたバレーのコンサートが5時間前に中止になりました。原因は舞台装置をする人たちがストをしたのです。

交通機関の繁忙期を狙ってこの夏にはたびたびストが起り観光客は大変な困りようであったとのこと。

どの国もいわゆるソブリン・リスクを避けるために必死の国家運営のようです。

EU の中核となっているドイツとフランスの違いを体験しました。EU の求心力がどこから起きるか、原発問題と重なって人類的危機をはらんだ深刻な問題です。

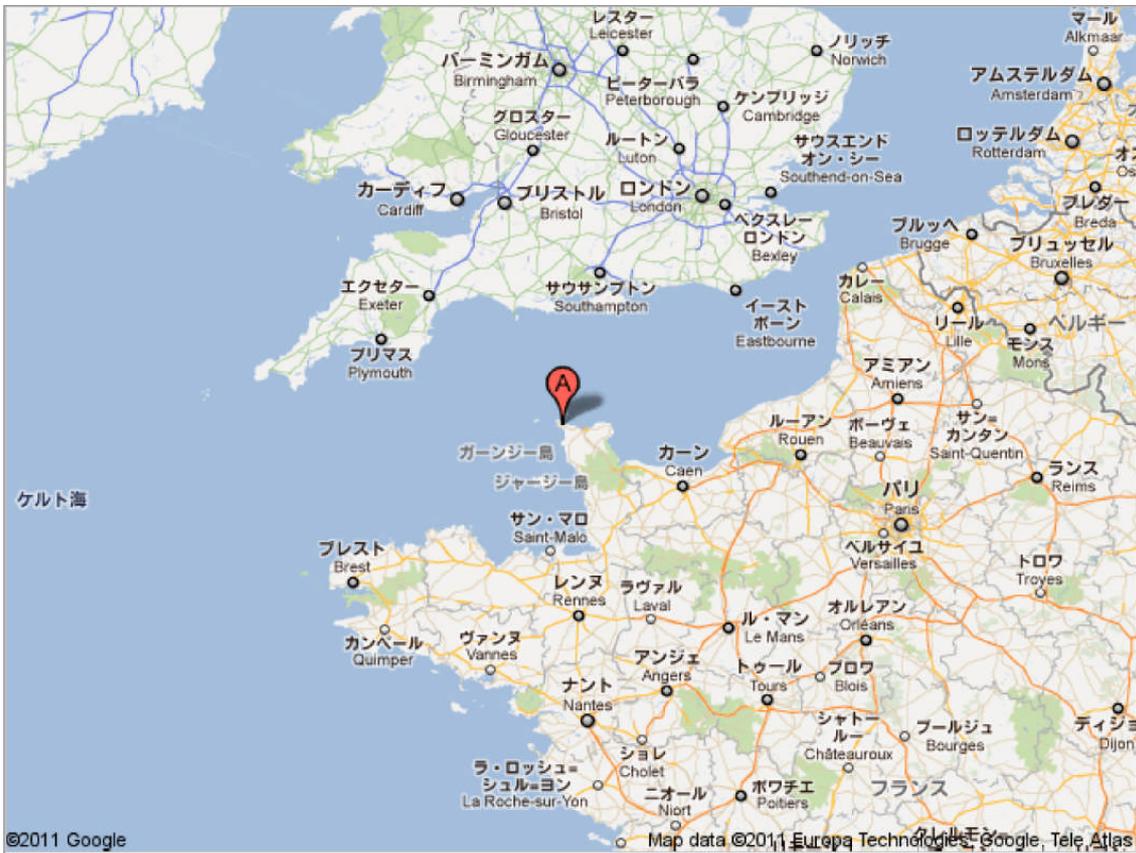
何処に希望を見いだせるのかわからなくなってきましたので、モネの「日の出」を見に行きました。工場地帯を背景にドンヨリとした空から日が昇る、海にかろうじて反射する光を目指して手で船を漕いでいる。今を予兆していたようでもあり、「日は又昇る」と希望を語ってくれているようでもあります。私はこのような風景を羽田空港のホテルに泊まったときに見たことがあり、少し心が和んだことを思い出します。

ベストピアは希望で終わります。これがモットーです。

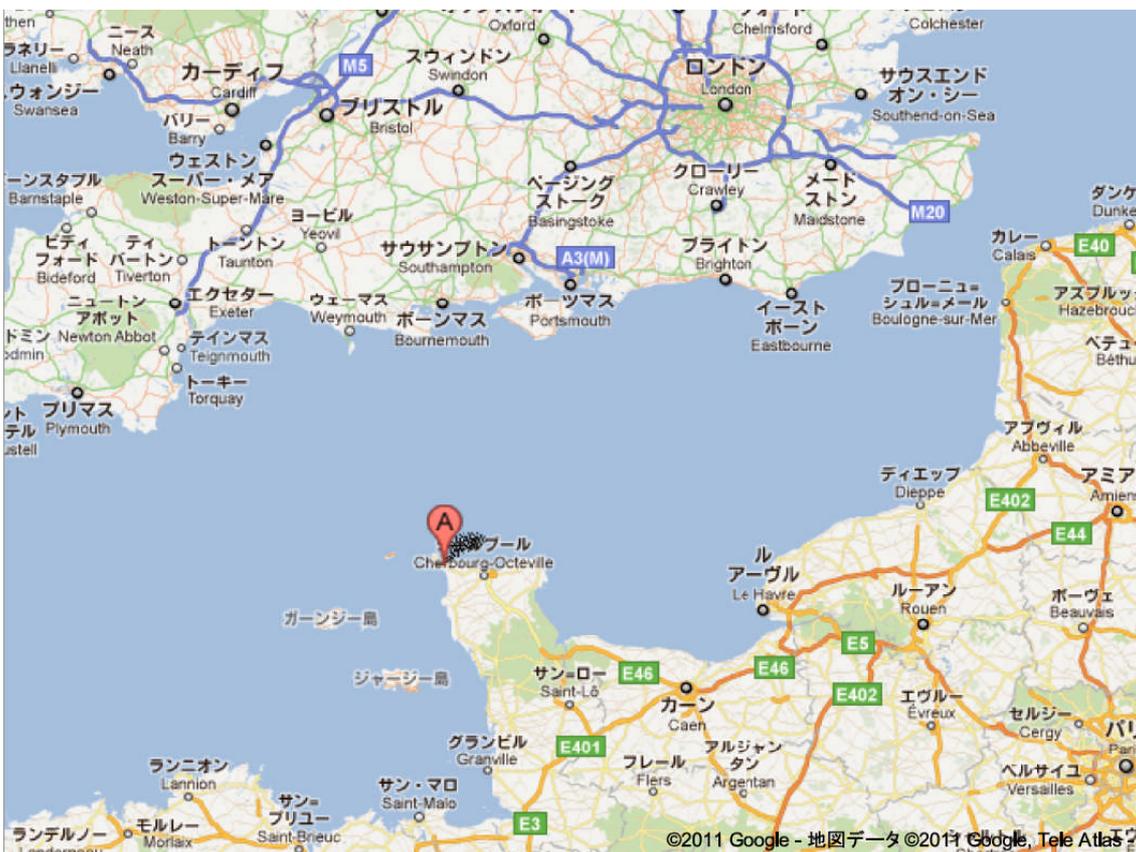
# A:ラ・アーク再処理工場

50440 Omonville-la-Petite, フランス

【地図 1】



【地図 2】



【地図 3】



Google Map より